

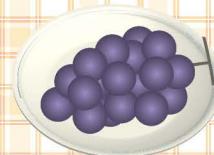
明るくポジティブ医療安全

メヂカル めぢ子

医療安全奥義集

(スタッフ用)

「メヂカルめぢ子」



職業は看護師(若き達人)。

spiritual sensor

強力な目ヂカラと触角センサー的靈感

により安全感性がひとりわ高い。

元気・明朗・闊達・ポジティブ。

沈着・冷静・果斷・アクティブ。

私服: ややメルヘン 愛読書: 歴史オタク 甲陽軍鑑*

山梨県に実在する(らしい)。

* 甲陽軍鑑: 武田信玄公・勝頼公2代の武田家の歴史を記した書物

コンテンツ

風

ハッキリハキハキ念押し！指差し呼称

甲陽軍鑑に学ぶ安全①：信玄公の念押し確認

確実 6R

甲陽軍鑑に学ぶ安全②：武田信繁家訓 武士の心得

的確・残す記録

甲陽軍鑑に学ぶ安全③：現代に伝わる武田家の事実 甲陽軍鑑

林

私は慌てない

甲陽軍鑑に学ぶ安全④：遂境にも沈毅果断な氏康公

寝た、食べた、体調管理ヨシッ！

甲陽軍鑑に学ぶ安全⑤：休息の効果をよく知る信玄公

すらりと SBAR

甲陽軍鑑に学ぶ安全⑥：新参者真田の巧みな上申

火

ミラクルリカバリー

甲陽軍鑑に学ぶ安全⑦：(第4次)川中島の戦い① 信玄公の踏ん張り

日頃も五感で実践 KY

甲陽軍鑑に学ぶ安全⑧：(第4次)川中島の戦い② 謙信公の危険予知

装備万端 いざ出陣

甲陽軍鑑に学ぶ安全⑨：常に兜の緒を締めよ

山

聞き流さず 留意

甲陽軍鑑に学ぶ安全⑩：義元公の聞く耳 荣光と破滅

若気に注意 敬慎鍛錬

甲陽軍鑑に学ぶ安全⑪：若気の至りへの気づき 義信公と信玄公

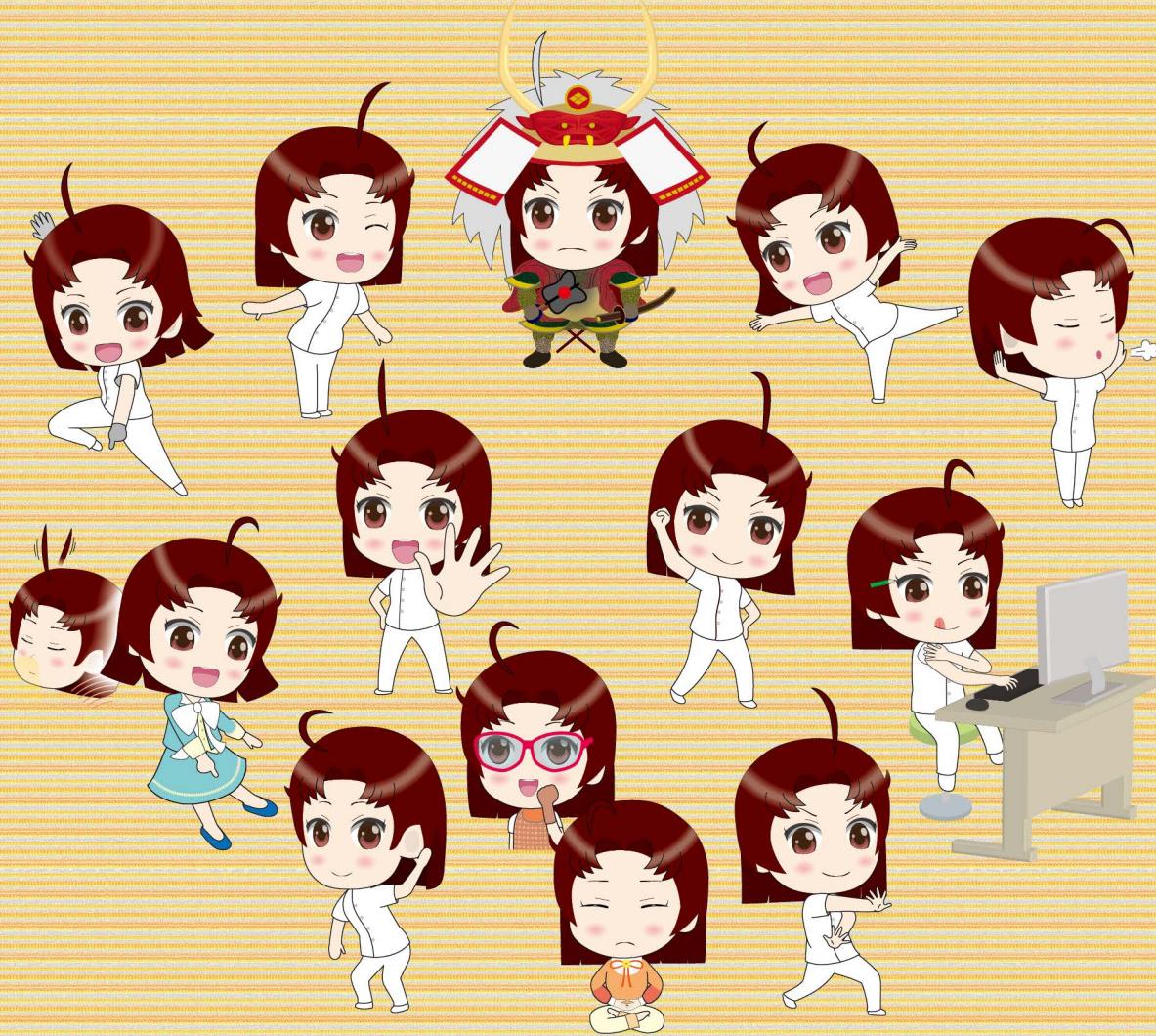
毒は薬 薬が毒 細心注意

甲陽軍鑑に学ぶ安全⑫：長篠の戦い 強すぎて敗れた勝頼公

甲陽軍鑑に学ぶ安全⑬：人は誰でも、英雄でもミスをする

情けは味方
誰は敵なり

人は城
人は石垣
人は塙



武田家年表

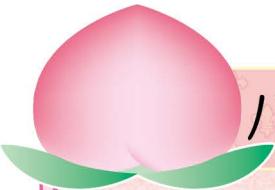
- 1521(大永元) 年 信玄公誕生
- 1541(天文 10) 年 信玄公、父信虎公を追放し武田家家督を継ぐ
- 1542(天文 11) 年 瀬沢の戦い
- 1546(天文 15) 年 氏康公の河越城の戦い
- 1548(天文 17) 年 上田原の戦い、塙尻峠の戦い
- 1559(永禄 2) 年 出家(この時から信玄と号す。それ以前の名は晴信)
- 1560(永禄 3) 年 桶狭間の戦いで義元公討ち死に
- 1561(永禄 4) 年 謙信公の小田原侵攻、(第4次)川中島の戦い
- 1565(永禄 8) 年 義信事件(義信公の謀反計画発覚。2年後、義信公自害)
- 1569(永禄 12) 年 小田原侵攻・三増峠の戦い
- 1572(元亀 3) 年 三方ヶ原の戦い
- 1573(元亀 4) 年 4月 12 日 信玄公死去
- 1575(天正 3) 年 長篠の戦い
- 1580(天正 8) 年 膳城の戦い
- 1582(天正 10) 年 勝頼公、織田軍に攻められ田野で討ち死に





念押し!

メヂカル
+めぢかる+



ハッキリハキハキ念押し！指差し呼称

指差し呼称は、自分の行動を自分でチェックする、いわば一人Wチェック。ちゃんと行えばほぼ間違いは起こらない。しっかり頭を注意モードに切り替えて指差し呼称しよう。マンネリ化しないよう、時には左右の手や、振り下ろし方を変えたり。工夫しながらいつも確実に念押し確認とするのだ。

信玄公の念押し確認

甲陽軍鑑に学ぶ安全①

一五七二（元亀3）年、武田信玄公は徳川家康公と遠江国三方ヶ原で戦い、織田信長公の援軍もろとも散々に打ち破った。この戦いの前、信玄公は、家康公が若いながらも東海道随一といわれる程の武将であり、かつ、遠方にさらなる敵援軍が控えていたため、もし勝つても次の戦いで負けてしまうと考え、決戦を避けようとしていた。ところが、偵察の報告によると徳川・織田連合軍の軍勢は少なく、戦えば勝てそうだということであった。それでも信玄公は、偵察上手の者にもう一度偵察させて前の偵察が正しいことを念押し確認した上で、慎重に戦闘を開始している。この戦いに限らず、信玄公は念

押し確認を徹底している。（第4次）川中島の戦いでは、目の前に現れた上杉謙信（当時の名は上杉政虎）公の部隊の動きを撤退だと報告が撤退ではなく「車があり」という攻撃の陣構えであることを察する部下に対し、どのように動いたのかを改めて聞き出し、それが撤退ではなく「車があり」という攻撃の陣構えであることを察知し、自軍を整えた。また相模国三増峠の戦いでは、敵である北条方の者を複数生け捕りにして情報を聞き出し、北条軍が三増峠で待ち構えていることを入念に確認し、準備を整えている。このような信玄公だからこそ、その統治時代、甲斐本国への他の國軍の侵入を一切許さなかつた。

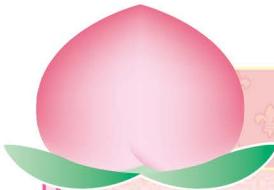
*出典：品32、35、39

確実



- ①親指：正しい投与時間
(親は時間にうるさい)
- ②人差し指：正しい患者
(人は合っていますか？)
- ③中指：正しい方法
(体の中に入れる方法は合っていますか？)
- ④薬指：正しい薬剤
(薬剤は合っていますか？)
- ⑤子指：正しい用量
(子供は量が重要です)
- ⑥手掌：正しい目的
(使用目的の根拠を把握)

6R



確実 6R

与薬の際の確認項目は大きく分けてしまえば6個しかない。それだけで良いのだ。ただし、様々な薬や病態があり、看護業務自体も複雑であるから機械的作業で片づけられないのも事実。残念ながら頭を働かせていちいち考えて、形ばかりの確認にならないよう努めなければならない。全体の流れの中で確実に行えるように、達人を目指して腕を磨こう。

武田信繁家訓

武士の心得

甲陽軍鑑に学ぶ安全 ②

信玄公の弟君信繁公は、父斐国を統一した猛将であつたが、非道の国主に成り果てて家臣・領民の信頼を失い、信玄公に追放されたが、信繁公は生涯兄に忠義を尽くした。その信繁公は子信豊に99箇条からなる教訓を与えた。そこには武士としての心得が細かく書かれている。戦場においては全力を出すこと、油断なく行儀を心がけること、武勇を心がけること、嘘を言わないこと、愚痴を言わないこと、学問をぬからないこと、歌道に精通すること、礼儀正しくあること、風流に過ぎないこと、いつでも堪忍の二文字を

心がけること、武具は怠りなく準備しておくこと、等々。戦場で全力を出すために日々鍛錬する。常に行儀よく、礼儀正しくあるために、人が見ていないところでも心がける。つい嘘や愚痴を言わない。学問や歌も、形だけ学ぶのではなく、実践で使えるよう、秀歌を詠めるよう努力を積み重ねる。簡単といえば簡単、難しいといえば難しい、このようないつ一つを自然にこなせるのが真の武士である。

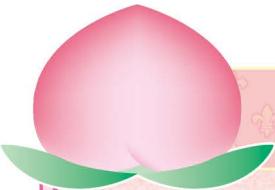
守るべき項目を決め、実践を積み重ねる。職種問わずこれが極めていくということだ。

べき項目を決め、実践
里ねる。職種問わずこ
のていくことだ。

確 確 的

残す

記録



的確・残す記録

記録をつけるのは面倒。だが、記録は患者や治療に関わるみんなのもの。必要なことを書かなかつたり、いい加減に書くことがないように。また、ちゃんととした記録なら、何かあった際、自分自身を守ってくれる。ペンは剣よりも強し、裁判だろうが何だろうが強力な武器・防具になるのである。的確にスマートにすらすら書けるようにがんばれ！

現代に伝わる武田家の事実

甲陽軍鑑

甲陽軍鑑に学ぶ安全③

春日虎綱（高坂昌信）は元農民で、裁判で父の遺産を失つたところを信玄公に取り立てられ、以降、その恩に報いる活躍を続けて重臣となつた。甲陽軍鑑は、その春日の口伝を中心とする書物である。甲斐一国からはじまり、信濃、駿河を制圧し、遠江、三河、上野、美濃、飛騨、越中にも領域を拡大し、そして滅んだ武田家の歴史が記載されている。もちろん真実とされた記載もあるが、武田家や春日の滅亡を経てこれだけの記録が残っているのは奇跡である。

的確な記録であれば何百年たつても当時の記憶は残る。記録は強靭な生命力を持つ。今書いている医療記録はその患者の

人生の一部であり、書く人自身の行つたことの証拠でもある。だが、数時間後、数日後に事実が残らなくなれば、もうその時点

で歴史から姿を消してしまう。信玄公は死の6年前、「脇」

（胃癌か？）と診断され、先が

長くないと悟っていた。三方ヶ原の戦いの少し後、一旦甲府に

戻り療養して戦線復帰したが、戦地で倒れた。口に腫物があり、歯が5、6本抜け、死脈

を打つ状態となつた。そしてそこにいる一門・家臣すべて

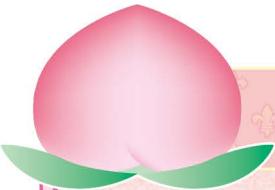
を集め遺言し、最期を迎えた。

信玄公の医療記録は400数十年後の今に厳然と残つていて。

*出典：起巻第一、品39、末巻下巻初



私は
焼
芋
パン
て
や
み
い



私は慌てない

慌ててパニックに陥ってしまえば、どんな優秀な専門家も素人と同じ。何よりまず慌てない。もし慌ててしまっても落ち着けばよい。手を止め（つまりタイムアウト）、息を吐き、一歩下がって落ち着きを取り戻し、素人からプロフェッショナルに戻る。すべてはそれからだ。あまり心配するな、経験とともに慌てなくなる。

逆境にも沈毅果断な

氏康公

甲陽軍鑑に学ぶ安全④

小田原を本拠地とする北条氏康公は、数々の危機をことごとく跳ね除け、関東に霸を唱えた。一五四五（天文14）年から翌年にかけて、今川義元公に加え、上杉憲政、上杉朝定、足利晴氏に同時に攻められた際、慌てず義元公と和議を整えた上で、10倍の数の両上杉・足利連合軍を攻めて打ち破った（河越城の戦い）。一五六一（永禄4）年、謙信（当時長尾景虎）公と関東諸将総勢10万といわれる大軍に攻められた際、動じず持久戦に持ち込み、謙信公にむなしく引き上げさせた。一五六九（永禄12）年、信玄公との対決では、信玄公は小田原まで進撃したものの、氏康公は籠城して山の

ごとく動かず、隙を見せない。信玄公もしばらく林のごとく静かに対陣したが、これ以上の戦果は望めないと考え風のごとく撤退を開始した。しかし、氏康公は逆襲策を練っていた。先発隊に先回りさせて途中の三増峠を固めた上、氏康公本隊が追撃を開始する。信玄公は、挟み撃ちされるまいと、火のごとき勢いで三増峠を強行突破し、辛くも甲斐に帰還した。

昔、当時まだ珍しい鉄炮の音に驚いたのを恥と思い、小刀で自刃しようとした、側の者に止められた少年がいた。これがこそが後の氏康公。この心意気で、信玄公や謙信公に劣らぬ名大将となつたのである。

*出典・品6、12、13、35

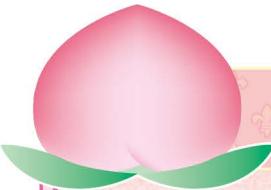
掠疾如如
火徐如動如
山侵

きのう良く寝た

あさ食べた



体調管理
ヨシツ！



寝た、食べた、体調管理ヨシッ！

看護師は心と体が資本。腹が減っても、睡眠不足でも、疲れていても戦はできない。どんなスキルや経験よりもまず自らの健康。心身の状態をすこぶる高めて看護に臨め。もし、疲れていたり悩み事があるなら、心身の状態が万全でないことを自覚し、より慎重に努めてその場を乗り切ろう。そして必ず休息して回復だ。

休息の効果をよく知る

信玄公

甲陽軍鑑に学ぶ安全⑤

一五四八（天文17）年、信玄（当時晴信）公は、信濃国上田原で村上義清と戦い大苦戦となつた。最後はどうにか村上軍を退却させたが、重臣板垣信方の討ち死にをはじめ大損害を被り、信玄公自身も2ヶ所に傷を負つた。苦い経験をした信玄公は甲府に戻り、「島の湯」で30日間の湯治をして次戦に備えた。そして、好機とばかり攻めてきた小笠原長時、木曾義康の信濃連合軍を迎撃ち、別働隊による背後から奇襲などで大勝した（塩尻峠の戦い）。湯治が信濃制圧の大好きな原動力となつたのである。

遡る一五四二（天文11）年、信玄公が武田家家督を継いだばかりの頃、武田家がまだ強大で

なく、しかも混亂していることに乘じ、小笠原、村上、木曾、そして諏訪の連合軍が甲斐国に侵攻しようとしたことがあつた。信玄公は、甲信国境に接近した信濃連合軍が3日間休息しようとしているという情報をつかんだ。信玄公は、休息して軍を整えた上、大軍を分散して攻めてこられると守り難いと考え、直ちに甲府を出立し、翌朝、逆に先制攻撃をしかけた上、6時間にわたり何度も攻めたて打ち破った（瀬沼の戦い）。信玄公は自らについてだけではなく敵についても休息の効果をよく理解していたのであつた。

*出典：品22、24、27



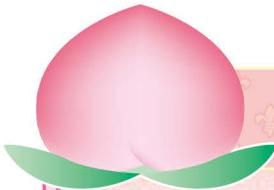


S ituation

B ackground

A ssessment

R ecommendation



すらりと SBAR

SBAR は相手にものを端的に、しかも、相手との共同作業不要で一方向的に伝えられる便利なツール。すらりと言われたら、職位の差や親しさに關係なく受け止めざるを得なくなるのが人の性。相手の都合や意識を踏まえた伝え方が一層効果を引き立てる。SBAR は古今東西を問わず普遍の技だ。

新参者真田の巧みな上申

甲陽軍鑑に学ぶ安全⑥

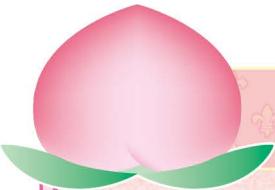
真田幸隆（当時幸綱）は信濃国小県に領地を持っていたが、それを失い牢人した後、信玄公に仕えた。一五四六（天文15）年、ちょうど村上軍と対決する時分、新参者の真田は板垣信方ら重臣と話す機会をもつた。そこで真田は、「私が晴信公のことを思つていることは皆様に決して劣らないと自負しておりますが、まだそれによさわしい奉公ができるおりません」と忠義の心意気を示して切り出した。そして、「村上義清は越後と通じております。その越後の長尾景虎はまだ数え17歳ですが、武勇の様は晴信公と少しも違わぬと聞いております。義清は景虎と和睦の交渉をしており、両者の間では領地を巡る

争いがあるものの、すぐにでもまとまる可能性があります。そうなれば晴信公の前に立ちはだかり、領土を広げていくことが困難となるでしょう」と説明する。状況（S）と背景（B）、評価（A）をすらりと伝えたのである。こうしてはるかに地位の高い板垣らに耳を傾けさせ、「晴信公の勢力拡大とならないのは残念ですでの策を申し上げましょうか?」と付け加えた。板垣らは大事を理解し、真田に策（つまりR）を尋ねた。こうして真田の策が実行され大成功をおさめ、村上軍を弱体化させるとともに、真田は武田家の中での地位を高めたのであった。

*出典・品27



ミラクル
リカバリー



ミラクルリカバリー

人はミスをする生き物。しかし、逆境を奇跡的に乗り越えるのも人。患者の生命が危機に瀕している時、看護師は、奇跡的なリカバリーができるチャンスを与えられる。人の命を救えば、世の中ではヒーローと呼ばれる。普通の人は真似したくなつてできない。危機に立ち向かい、何度も奇跡を起こして何度もヒーローになろう！

（第4次）川中島の戦い① 信玄公の踏ん張り

一五六一（永禄4）年、信玄公は謙信公と信濃国川中島で対峙した。謙信公は武田方の海津城を攻め落とすと近くの妻女山に陣取っていたが、不思議と海津城を攻めなかつた。2日後に到着した信玄公は上杉軍の退路をふさぐ形で陣を敷き、様子をうかがつたものの、謙信公はやはり動かず、信玄公はすんなり海津城に入つた。この時、兵力は武田軍2万、上杉軍1万3千。そして、信玄公は重臣飯富虎昌、馬場信春（当時信房）の進言を容れ、攻撃を仕掛けることに決定した。参謀山本勘助の立てた作戦は、武田軍を二つに分け夜陰に紛れて行動を開始し、本隊8千は上杉軍の退路にあたる八幡原に陣を敷き、明け方、別働隊1万2千が妻女山に攻め込んで上杉軍を八幡原に追い出し、本隊とともに挟み撃ちにする、というものであつた。そして、決戦の日を迎える。夜明けとともに

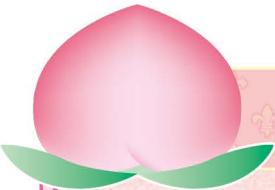
信玄公が八幡原に見たものは、まだいるはずのない上杉軍であった。謙信公は作戦を見破り、全軍で妻女山を出て、武田別働隊が空の陣地に突入してくる間に、手薄な本隊に突撃を仕掛けってきたのであつた。数で勝り、かつて強力な上杉軍に攻撃され、多くの部隊は崩れかかり、副将格の信繁公や山本他多くの死者を出す厳しい局面となつたが、信玄公自身は負傷しながらも本營の牀机（椅子）から一步も引かずに踏みとどまって戦いを指揮した。粘り続けること数時間、別働隊が妻女山から到着し、上杉軍を後方から攻めたため上杉軍は崩れ、越後撤退していく。信玄公があきらめたりうろたえていたら、上杉軍に壊滅させられていたであろう。まさに必死の踏ん張りが奇跡的なリカバリーを生んだのであつた。

* 出典：品32

日頃も五感で



実践
KY



日頃も五感で実践 KY

危険予知 (KY) は、日々の積み重ねがものをいう。

KYT の時だけの KY であれば、訓練のための訓練になつていざというとき何もできない。大事なのは日頃から五感を使って KY を心がけることと、気がついたらすぐ実行する習慣を身に染み込ませること。日々の実践で感覚を研ぎ澄ませて「スピリチュアルセンサー」を手に入れよう。

謙信公の危険予知

それにも裏の裏をかいた謙信公は見事である。決戦前日午後、謙信公は妻女山から武田軍の様子を見て、先陣部隊と本陣部隊とで炊事の煙の様子が違うのに気づき、作戦を完璧に見破った。おそらく炊事の時間の差や煙の量から、軍勢を二つに分けること、さらには、夕食だけでなく翌日の朝食まで準備していることを察知し、すべてを洞察したのである。また、謙信公は日が暮れてすぐ行動に移したが、武田軍にそれを悟らせなかつた。普段から夕食時に翌日の食事を各3食分用意するという軍律があり夜の闇に炊事用の火を焚かずに済んだため、かつ、大した音もたてず手前の千曲川を全軍に渡らせたためである。これは日頃からの危険回避行動の実践がなければとてもできることではない。さらに、千曲川の川原に千の軍勢で甘粕景持を配置したが、甘粕は

小勢ながら別働隊の攻撃を引き受けるとともに、別働隊に突破され上杉軍が（最後尾）の役に徹し、散り散りになつた兵を静かに集めて越後に帰つて行つた。上杉軍の損害を抑える殊勲であり、この配置も的確であつた。振り返つて思えば、川中島に先着した謙信公が海津城を攻めなかつたのも、この決戦を見通しての作戦だったかもしれない。

月毛の馬で単騎武田本營に突入し、三尺の刀を振るつて信玄公に襲いかかるなど、戦闘での勇猛さばかりが目立つ謙信公であるが、冷静そして深遠な洞察力と日頃からの実践があつたからこそ、こうも靈的なまでの危険予知をして、あざやかな手際で信玄公を絶体絶命の危機に陥れたのであつた。

装備

万端

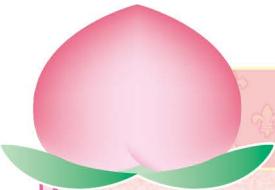


放射線
管理区域



指示あるまで入室
しないで下さい。
院長

い、や、
出陣



装備万端 いざ出陣

防具をつけず戦場に向かうことにならないように。無防備で危険に向き合うなど愚の骨頂。どんな戦も装備を固めてから始まる。感染、針刺し、抗癌剤被曝、電離放射線被曝その他、いずれもやるべき対策は決まっている。まあいいや、なんて思って手を抜くな。後悔する事態とならないよう常に物理防御を徹底しよう。

常に兜の緒を締めよ

甲陽軍鑑に学ぶ安全⑨

戦争は命の奪い合いであり、装備の弱さは命の危険に直結する。先の瀬澤の戦いは信玄公の攻撃で勝利となつたが、若い信玄公を侮る信濃勢は休息にかまけて油断もしていた。朝霧が晴れるまで武田軍の攻撃に全く気づかなかつた信濃勢は、武具や馬具を装備することもなければ兵の配置もしていなかつたのである。

また、戦場にある限り、兜の緒は締め続けなければならない。板垣信方は幾多の戦功輝く武将であったが、上田原の戦いのさなか、油断で命を落とした。戦上手の板垣は村上勢を撃退し、勝ちに奢つて武器を置き、配備を解き、討ち取つた村上軍の兵の首の実検をしていたところを体制を立て直した村上軍に攻め込まれたのであつた。

攻撃時はなおさら装備を怠つてはならない。長篠の戦い後の一五八〇（天正8）年、少し余力のある武田

軍は上野国東部に進出した。この時、敵方の膳城付近で防備を解いていたところを攻撃された。それは簡単に擊退したが、その勢いに任せて甲冑をつけないまま城攻めにかかつた。勝頼公は止めようとするもすでに攻撃は始まっていた。膳城を陥落させ一番乗りの栄誉を手にした原昌栄であったが、頭に受けた刀傷が

もとで若いながらも死亡した。

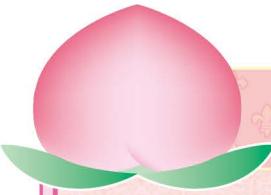
信玄公は、甲斐国の捷である甲州法度之次第で、戦国の世であるからには諸事をなげうつて武具を用意することが肝要である（20条）と定めている。信繁公も家訓で武具の準備を説く。装備はしつかり用意した上でしつかり装着してようやく意味をもつ。信濃勢や板垣、原のような無意味な不覚をとらないよう、万端を心がけねばならない。

* 出典・品27、32、56

聞
き
流
さ
ず



留
意



聞き流さず 留意

やることが多くて忙しかったり、情報量が多くて処理が大変な時、ついつい大事なことまで聞き流してしまってはいないだろうか。溢れる情報に耳を傾け、情報の入り口はオープンにしつつ、必要な情報と不要な情報を振り分けられる達人を目指そう。まずは、聞き流さずに留意、この心がけで業務にあたれ。

甲陽軍鑑に学ぶ安全⑩

義元公の聞く耳 栄光と破滅

今川義元公は、信玄公の姉婿にして信玄公の嫡男義信公の舅である。博学の僧侶太原雪斎の補佐を受け、若くして駿河、遠江、三河3ヶ国の大名となつた。しかし、太原の死去後、織田信長の策略にかかり、配下で、織田家の情報を逐次報告する戸部政直を弁解も聞かず処刑するなどしたため、一五六〇（永禄3）年の桶狭間の戦いで、2万の兵力がありながら7百の織田軍に討ち取られてしまった。

その義元公に、かつて山本勘助が仕官を申し出たことがあった。軍法も剣術も一流であると紹介され、手柄をあげながら9年待つたが、ついに義元公は取り立てなかつた。醜男であり、隻眼、手指

や足の不自由という山本の外見からである。一方、武田家では山本の能力が評判となり、召し抱えることとなつた。信玄（当時晴信）公は山本と対面すると、様々なハンディキヤップがありながら名声が高いのはよほど優れているのである。うと考へ、即座に知行（給料地）を倍増した。山本は、（第4次）川中島の戦いでは謙信公に屈したもの、それ以前の数々の戦いで華々しい活躍を果たし、武田家の繁栄に大いに貢献した。

太原には聞く耳を持つて輝いた義元公。戸部や山本らには聞く耳なく、信玄公と正反対の結果を迎ってしまった。

*出典：品6、11、24

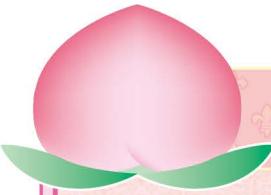
若 気 に 注 意



勘 小 真 錢 又 金 鍊

けいしん

たんれん



若気に注意 敬慎鍛錬

慣れてくると、度を越えて調子に乗りがちなのが若さの悪さ。経験不足があるのだから、先人たちを敬い、慎む、そして鍛錬を積む。その前提で物事に若者らしく^{はつらつ}潑刺とチャレンジし、上を目指す。こんな心がけの若者ならとてつもない力を發揮できるだろう。間違っても思い上がりだけで突撃しないこと。

若気の至りへの気づき 義信公と信玄公

(第4次)川中島の戦い最終盤、武田軍本陣に千人を超す上杉軍部隊が接近した。信玄公は、本陣の人数が少ないとから、もし謙信公の部隊であれば危険と考え、撤退を指示した。しかし、義信公は強気に拒否した。結局、その部隊はそのまま撤退し、また、謙信公でなく甘粕隊であった。義信公は戦後、撤退すべきでなかつたと信玄公をいつまでも批判した。挙句、謀反まで起^こそうとした。身を滅ぼした。義信公は若さゆえに無謀に陥った上、些細な結果論に固執し、自重できなかつた。信玄(晴信)公も若気の過去がある。家督相続直後、信濃勢を4度撃退し傲慢になり、家臣を無視して連日連夜遊び呆けてい

た。そんなある

日の歌会で、文盲で歌が詠

めないはずの板垣信方が立派に歌

を詠み信玄公を驚かせた。板垣

は陰で猛勉強していた。板垣は尋ねる、もつと上手になるにはどれほど習えばよいでしょうかと。信

玄公は答える、今後も努力して

いけば全然苦労しないだろうと。

板垣は切り出す、好きなことば

かりやつて努力しない晴信公は信

虎公に勝るとんでもない悪大将で

す、ご立腹ならこの板垣をどう

ぞご成敗くださいと。信玄公は

己の愚かさに気づき、涙を流して

反省し、行いを正すと誓つた。

若気は多少は仕方ない。大切なのは敬慎の心を失わないことだ。

*出典・品12、19



薬は毒) 毒が薬



長篠の戦い

強すぎて敗れた勝頼公

信玄公の四男勝頼公は武勇の誉れ高く、数々の戦功をあげた。三河ヶ原の戦いでのば抜けた働きもあざやかであった。そして、強すぎるとまで言われる大将となつた。

武田家を継いだ勝頼公は一五七五（天正3）年、徳川方の三河国長篠城を包囲した。対し、家康公が出陣するとともに信長公自ら援軍となり、大軍で近くの有海原に押し寄せた。武田軍は軍議を開き、馬場信春、内藤昌秀、山県昌景ら多くの重臣は撤退を進言した。しかし、徳川・織田連合軍相手に大活躍した過去を持つ勝頼公は決戦を選んだ。この時、武田軍は留守の守りや長篠城の備えなどに兵を割いたため1万2千。一方、連合軍は後から見積もつた数字で7万余。劣勢の武田軍は土屋昌続の捨て身の突撃をはじめ起死回生の波状攻撃を敢行し、連合軍の三重柵を一部突破するなどしたが、どんどん

ん消耗していった。

しかし引き下がらない。馬

場隊では、馬場自らは死を決し踏みとどまることを選びつつ、部下に退却を命じたが、誰一人逃げず馬場

を見捨てない。このような形で多く土屋以下名だたる武田武者が数多の部隊が長時間戦線を維持したが、衆寡敵せず、馬場、内藤、山県、

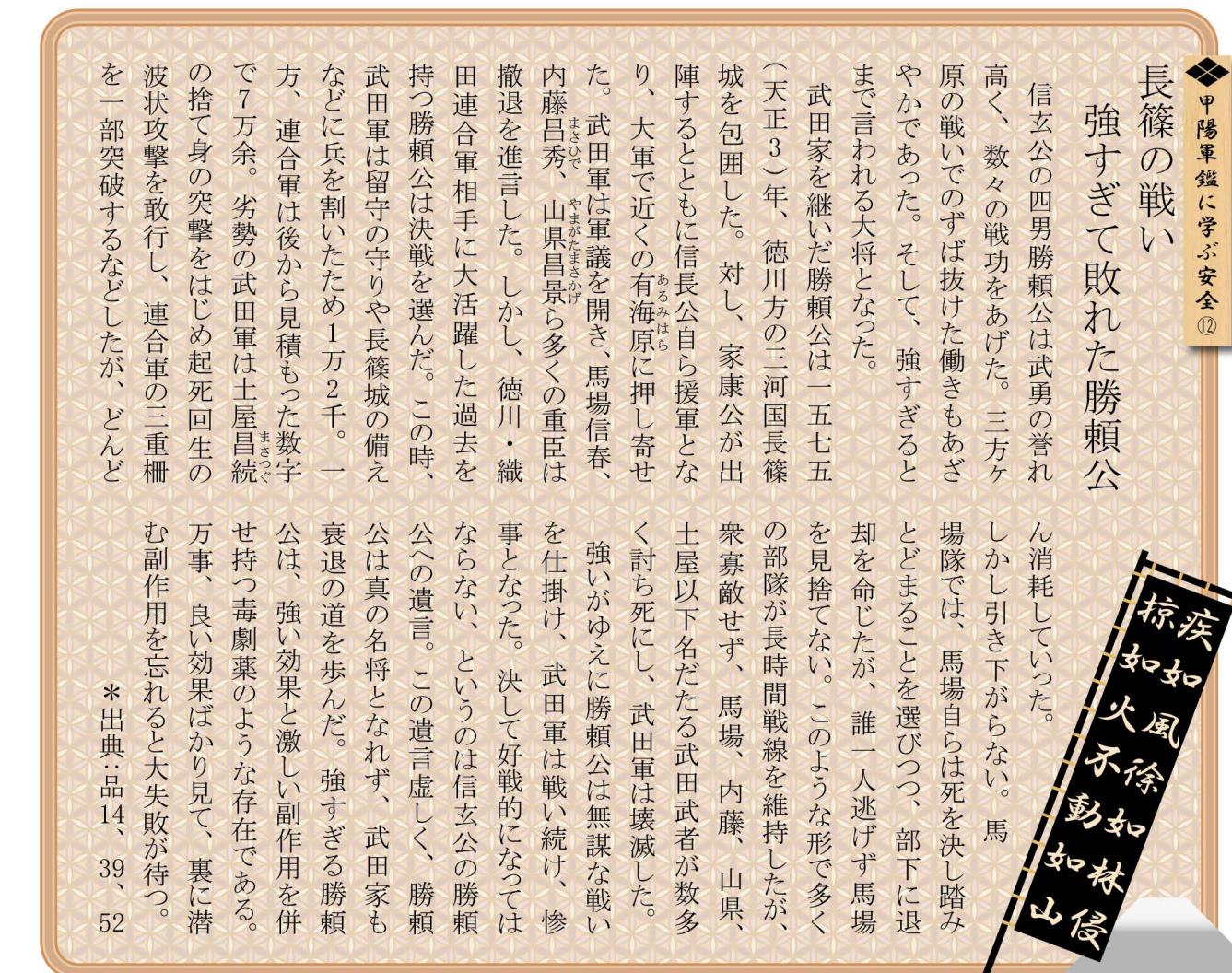
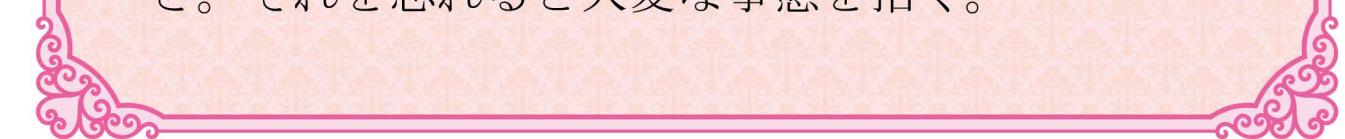
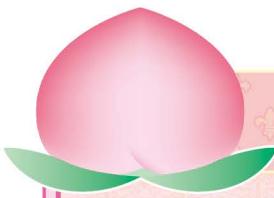
強いがゆえに勝頼公は無謀な戦いを仕掛け、武田軍は戦い続け、惨事となつた。決して好戦的になつてはならない、というのは信玄公の勝頼公への遺言。この遺言虚しく、勝頼

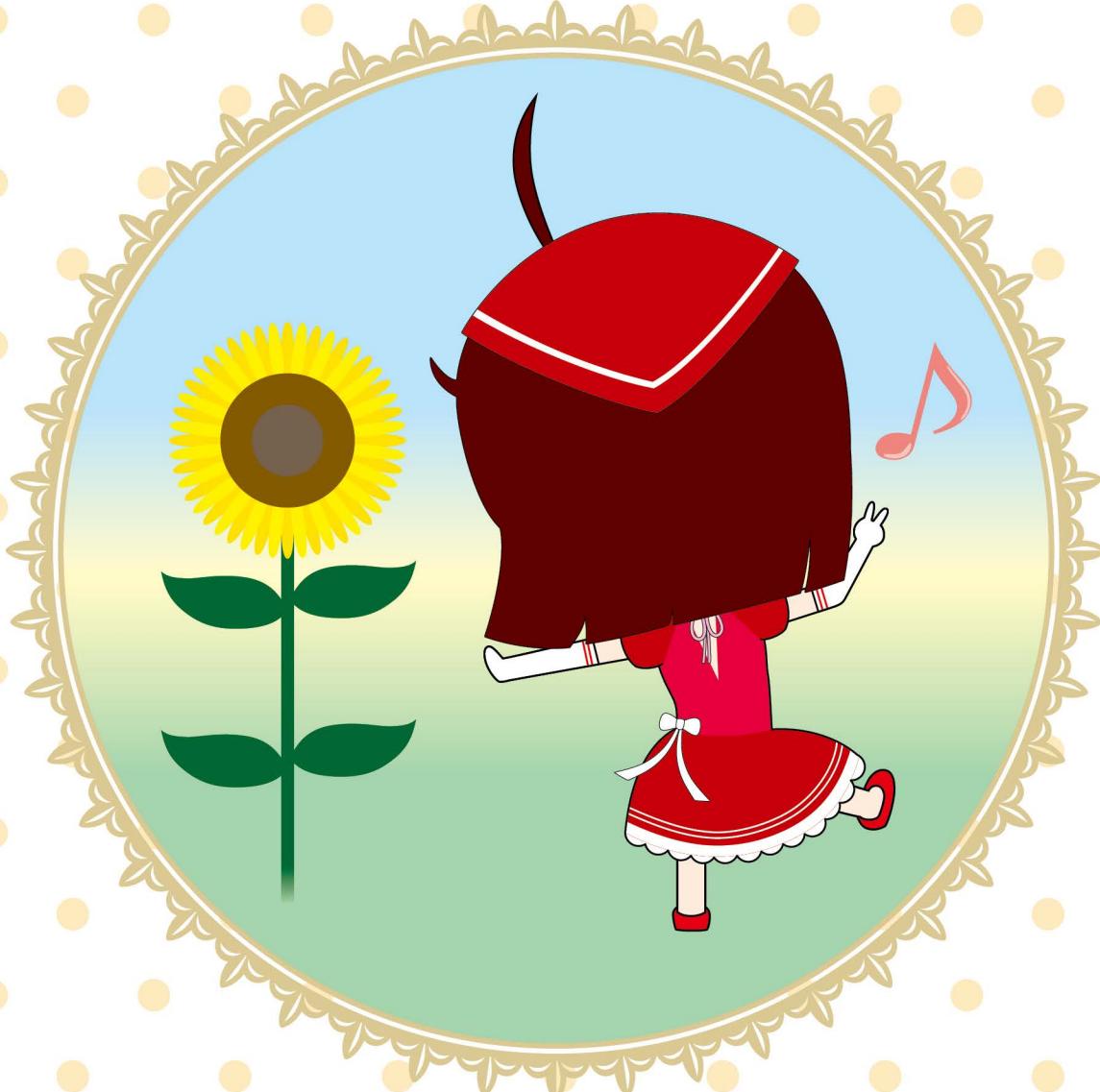
公は、強い効果と激しい副作用を併せ持つ毒劇薬のような存在である。万事、良い効果ばかり見て、裏に潜む副作用を忘れる大失敗が待つ。

* 出典：品14、39、52

薬は毒 毒が薬 細心注意

薬は効き目があるから薬である。効くということは体に影響を及ぼすということであり、その点、毒と同じである。影響が良い程度にとどまれば薬、それを超えると毒。単に呼び方が変わるだけだ。都合良いことばかり見るな。毒の怖さはすなわち薬の怖さ。それを忘れると大変な事態を招く。





人は誰でも、

英雄でもミスをする

信玄公は50余年の輝かしい人生において何度か不覚をとつた。謙信公や氏康公も危機に陥つた。家康公はみじめなまでの敗北を経験した。信長公や義元公に至つてはその身を全うできなかつた。人はミスをする生き物、命を賭けて戦う英雄たちといえど例外ではない。

大事なことは、負けないために戦い、もし負けても被害を食い止めるために戦い、次に勝つために戦い。戦いに次ぐ戦い、そして向き合う心。戦国の世はいつか終わる。しかし、医療事故との戦いは終わらない。医療安全は終わりなき戦いである。

(完)



◆甲陽軍鑑に学ぶ安全
終